

平成30年12月1日発行 春燈/第73巻第12号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月23日第3種郵便物認可

春燈

2018 December

12 月号



主宰の句

安立公彦

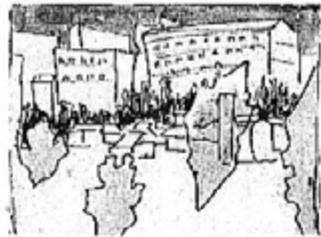
遠方に一村けぶる花野かな

その中に逝きしひとりや月の宴

剥く柿の実りの重さ手に愛づる

秋澄むや双峰凜と筑波山
(栃木勉強会)

われもまた路傍の石や十三夜



安住敦の句

風邪の身にまた別の訃の到るあり

安住敦自註句集 昭和五十年

「二月某日、女の声で電話があつた。石川桂郎が亡くなりましたと、告げてあと言葉がなかつた。」と自註にある。この年、角川源義氏が十月に亡くなつてゐる。句の中七の「また」はその訃を踏まえてゐるのであろう。両氏とも、師のかけがえない年下の友人であつた。

年賀状を書く年の瀬になると、年賀欠礼の葉書が加齢と共に増える。とりわけ友の訃に接するのは胸が痛む。

小島昭夫

古曆焚いてあとかたなかりけり

歴日抄 昭和三十九年

一年間の思い出の詰まった古曆。焚き終えた後に思い出までも消えてしまったような寂しさが残った。

「あとかたなかりけり」の措辞に、その寂寥感がひしひしと伝わってくる。昨年急逝した娘の曆には一年先までの予定が、びつしり書きこまれていた。とても捨て難く彼女の予定と共にこの一年を過ごした。今年の夏、すべて予定が終わり曆を焚いた。

木村梨花

燈下集



○ 鈴木直充

水澄むや小学校の授業中
重陽の水音立つる里曲かな
買食をして叱られて草の花
一書もて野分に籠もるひと日かな
豊年やにほふが如く出づる星

○ 高橋和女

日焼の子どつと降り来る旅客船
行合ひの雲やはらかに雁渡る
秋の町いちばん好きな服を着て
まだ消えぬ夢のかけらや星月夜
亡き人の恋しき日なり雁の空

○ 柴崎甲武信

姫去りし節の金色竹の春
蕎麦咲くや棚田の畦の幾曲り
遠野分足のうらより目覚めけり
ひたすらにむさぼる命流れ星
床の間に立てかけし三味西鶴忌

○ 鈴木静恵

草の絮業平塚の風に舞ふ
草の実を払ひ句会の座に直る
城址能の間合の闇や虫しぐれ
ひよんの笛吹き誰彼を偲びけり
運動会遠見に孫の教師振り

○ 近藤 牧男

濡れてこそ光る蕨や柿の空

逝く秋や絵地図を辿る指の先

秋灯下ひとりひとりに戻りけり

まばたきをする間も野分近づき来

裏返す枕の上を野分過ぐ

○ 吉澤 恵美子

北国の山裾揺する蕎麦の花

うしろより青空覗く夕野分

青空の透けて九月の金魚玉

南の海いくつ越ゆるや秋つばめ

秋の灯を小さく点せり眠りけり

○ ト部 黎子

新しき老いと向き合ふ銀河夜々

水の秋水琴窟の地のしらべ

秋燕や運河名残の水位計

見送りし機影遠のく夕月夜

秋分や光陰をつむ五輪塔

○ 卯木 堯子

大名町の廃校久し夕月夜（福岡）

ジーンズにポケット四つ大花野

旗日ゆえ朝刊嬉し敬老の日

秋の蝶直ぐにも潤む瞳かな

胸に秘する鬼灯愛の責務とす

○ 深川 敏子

坂道に軒灯つづくおわら盆

秋高しジュースを作りジャムを煮て

秋の風犬にもあるや診察券

虫の音の今夜はうすれ枕かな

紅葉狩使はなくなりし旅かばん

○ 大室 恵美子

予後の身の躁る辞書重き残暑かな

白桃や癒ゆるも自分甘やかす

悲しみは忘れ上手に曼珠沙華

忌を修し安堵の疲れ温め酒

健脚を取戻さんと登高す

○ 尾野奈津子

邯鄲の声を聴きぬる夢の中
虫の音はなべて片仮名闇揺らす
月山を彼方に置きて蕎麦の花
胸奥に秘むる本音や後の月
油断めさるな辛さ秘めぬる新生姜

○ 小嶋恵美

さはさとは秋を急ぐや梓川
穂芒や顎上げて牛人を恋ぐ
高原の月へ姉妹の二重唱
声あらば何を語るや曼珠沙華
二合半を傾け偲ぶ星月夜（舊様）

○ 三宅文子

少年に夕日の匂ひ鳳仙花
白露の日髪やはらかく結びけり
願ひ事ひとつとなりぬ天の川
大川の流れとろりと木歩の忌
しらつつゆの鏡花の墓へ詣でけり

○ 太田慶子

淋しらのかたまつてゐる曼珠沙華
白菊や聴いて欲しくて母の墓
言ひ出せばきりのなき事いわし雲
仏壇のほのぼの曇るふかし藪
満月がそこに高層レストラン

○ 青柳雅子

秋の天金輪際の青さかな
歳のほか誇るものなし敬老の日
秋の夜の夫と想ひを違へをり
恩讐は時のかなたへ菊人形
ユニクロのシャツを着てゐる案山子かな

○ 木多芙美子

黒牛の濡るる瞳や草の花
しばし秋思海底トネル抜けてより
底ぬけの空の青さや新松子
亡き人の匂のふと浮かぶ月明り
秋の夜の赤きシェードの枕上

余言

安立公彦

巫女にふと太初の面輪冬もみぢ

中野あぐり

緋袴に白衣の巫女の姿は如何にも清すがしい。少女の面差しはその清すがしさを更に深める。作者は神詣での折ふと境内を歩く巫女を見て足を止める。巫女は今しも、境内に世紀を重ねて聳える大樹の前に来た。その巫女に、ふと太初の面輪を感じる作者。誰しもそういう思いはあろう。傍らの一本の冬紅葉の彩りが巫女の緋袴に通う。

一書もて野分に籠もるひと日かな

鈴木 直充

今年は台風が殊に多かつた。茫洋たる大海や大陸を避け、この細長い列島を縦断する台風には執念を感じる。

そういう台風の荒れるひと日、作者は机上に一書を開いて読書に耽る。この句、「野分」が作者の思いを良く現している。同じ気象現象でも、台風と言う即物的な捉え方よりも、野分の方が、災害ではあるが語調に仄かな詩情を感じよう。「一書」とは何か。それは作者にしから分らないが、「野分に籠もる」との対比がみごとだ。

少年に夕日の匂ひ鳳仙花

三宅 文子

この句、九日本部句会で特選に選んだ。講評を記す。「夕日の匂ひ」が善い。「少年」だから「朝日」ではないかと言う声もあるが、この「夕日」は、少年の今日一日を生き生ぎと動いたという証。鳳仙花との取合せも絶妙。今読み返しても、その生新な思いは変わらない。重ねて述べるが、「夕日の匂ひ」が活きている。

淋しらのかたまつてゐる曼珠沙華

太田 慶子

今年もわが家の彼岸花は、九月二十日、秋彼岸の入りには咲き始めた。この花の群れ咲く様は息を呑むばかりだ。わが家の僅かな彼岸花さえ、葉もない細い茎の上に咲く朱の花蕊は、見続けていると何かしらの緊張感を覚える。

この句「淋しらの」の詠み出しが善い。「かたまつてゐる」も読みは固いが頷ける表現だ。「曼珠沙華」が活きている。作者の繊細な思いが息づく作品だ。

ハミングの昔の歌や十三夜

長谷川歌子

「昔の歌」は百人百様。唄う人の年齢により変わるの

当然のこと。作者の場合はどの時代の歌だろうか。しかし或る程度年齢を重ねると、妙に「昔の歌」が口を衝いて出るのは誰しも同じ。折しも「十三夜」、そういえば、「青い月夜の十三夜」という歌もあった。この句、「ハミンングの昔の歌や」に生活感がある。今年も十三夜の季節になった。「昔の歌」を口遊みつつ拘らない表現が善い。

かなかなの絶唱を聞く父祖の墓 久保 久子

この句、九月本部句会で特々選に選んだ。講評を記す。この「父祖の墓」には、代々の先祖の御霊が祀つてある。墓前に佇つ作者。折しも「かなかな」が鳴いている。その高いよく透る鳴き声は、「父祖の墓」を包み、作者を包む。更にその蝸の声は、墓に眠るご先祖にも届いているのだ。「かなかなの絶唱」がみごとだ。父祖の墓のみの世界を、善く表現している句である。

改めて見ても、秋の彼岸に相応しい作品と言えよう。

旅愁なほ簾名残の京の街 高埜 良子

この句も九月本部句会で特選に選んだ作品。

京都の街には、簾がいつまでも掛かっている所がある。旅人にはその秋の簾の風情が、旅愁の思いを募らせる。それはまた、京都という街の、古典を重んずる景観の一つで

もあろう。「簾名残の京の街」が善く出来ている。

望の月待つ間の髪を梳きにけり 小山 繁子

一 中秋の名月、いい言葉だ。今年は九月二十四日が十五夜だった。生憎、私の住む地は曇り空が夜まで続いたが、名月は、例え雲に閉ざされていても見る人の心にある。

この句、その望の月の昇るのを、「待つ間」と素直に表現したのが善かった。「待つ間」の時間は何よりも充実している。さらに「髪を梳く」という女性ならではの動きとして、名月を待つ思いを表現したのがみごとである。

農神の筑波山麓豊の秋 赤岡 茂子

筑波山は古来、「西の富士、東の筑波」と称され、敬われ親しまれて来た。標高は八七七メートルだが、『日本百名山』にも、『常陸風土記』の謂れを引いて紹介されている。勉強会の折、栃木のホテル七階から、西方の富士と東方の筑波を望んだ時の感慨は忘れられない。

筑波山が「農神」として厚い信仰を得ていることは、先述の『常陸風土記』に示されている。筑波山はまた雑歌の山でもある。「農神の筑波山麓」には、そういう豊かな内容が然り気なく表現されている。「豊の秋」を受けて、この句は正に筑波山の正鵠を得た作品と言えよう。

春星賞受賞作（12句）

夏の月 小林 紫乃

風薫る案内板の開拓史

土産屋の小さき木椅子やソーダ水

白靴の弾む山道水の音

山上湖の空を自在に夏つばめ

鹿の子の丸き瞳に見つめられ

風抜くる白樺林蝉しぐれ

暮れなづむ湖や葭切鳴くばかり

溪谷の吊橋涼し息ひそむ

水に触れ水を離れぬ糸蜻蛉

木洩れ日の原生林や苔の花

青胡桃こつんと肩に日暮路

吹抜けの窓いつばいの夏の月



春星賞受賞作（12句）

晩夏光 山下健治

甲斐駒の孤高の尖り青胡桃

沙羅の花結界に白散りばむる

はんざきや老いても淡き夢をもち

初蟬のひと鳴きを聞く母郷かな

偕老の腰に下げたる蚊遣香

炎天や人影のなき漁師町

宵涼し白く浮きたつ天文台

播州や明石のあげし夏の月

星近し闇深めゆく鮎の宿

妹の忌や妹に供ふる一夜鮎

海峡へ子午線よぎる夏燕

夕爾忌の海の青さや晩夏光



当月集

安立 公彦選



○ 持田信子

弥撤了へて弾む異国語秋高し

行く雲と流るる水や大根時く

走り蕎麦山の香ほのとまとひけり

街騒をのみ込む杜や秋深し

仏足石の曼陀羅絵図や水澄めり

○ 平沢恵子

水音の高きにゆるる吾亦紅

とんぼうの飛行の形に果ててをり

法師蟬道なりに来て道失せぬ

店頭の魚あをあをと秋の声

鉄橋の真下の陰の冷ゆるかな

○ 横山さくら

ラブソング口に座しぬる秋の暮

幾度か秋の箱根路父眠る

角張つた母の剥き癖富有柿

秋の水光とともに墓洗ふ

大小の枕並ぶる秋の蚊帳

○ 大西由美子

ブローチに欲しきとんぼや竿の先

朝顔や何遣るでなき小半日

キャリーバッグ引き摺る音や秋暑し

言はでもの一語すべるや新走り

独り居の隣家や寧き秋ともし

○ 中里よし子

木洩れ日を揺らす風あり小鳥来る

どこまでも青き空かな水の秋

亡きひとを恋へばこぼるる雨の秋

トンネルいくつ行く先々の蔦紅葉

僧正逝く添水の音も絶えにけり

春燈の句

安立 公彦選



露けしや卒寿の道も幅狭く

ヘルパーの手際の良さや吾亦紅

七回忌過ぎたる庭や月の萩

鉛筆の芯を頼りの夜なべかな

虫しぐれ音無く落つる砂時計

天井の高き酒蔵虫合せ

蘇る記憶の道や葛の花

長き夜や隣家のテレビ洩れきたる

秋彼岸渡し場跡の橋往き来

仲秋や顔まんまるの微笑仏

江東のかさ上げ護岸椋鳥来

鬼の子のあはれをききに蓑虫庵

大櫓そよりとませぬ秋暑かな

ガントリークレーン高々と鱗雲

東京 鈴木としお

兵庫 中上 馥子

東京 小林 文良

神奈川 田中 嘉信

翻る葛の葉陰の異人墓地

立ち向かふ後期高齢葛の花

磐梯山の大きく晴れて秋澄めり

天領の奇岩の塔や照紅葉

奇跡てふ主治医の声や秋の天

行き場なき除染の土や秋微雨

燕帰るこれに懲りずにまたおいで

初月や浮世の未練うつすらと

はたはたの健気に跳ぶを倣ひたし

シャンソンも無縁の世代枯葉散る

親離れ子離れをして扇置く

山裾の墓の地滑りそぞろ寒

糸瓜忌や母校に集ふ同期会

赤まんま道草をして帰りけり

福島 室井津与志

バンコク 大口 堂遊

東京 池上 昌子